

『源氏物語』 故前坊の遺言

The Tale of Genji, The previous Crown Prince's dying wish

太田 敦子*

Abstract

The chapter of AOI (Heartvine) in The Tale of Genji, The

previous Crown Prince's dying wish was inherited. The previous

Crown Prince's dying wish was the foundation of Empress

Akikonomu.

Keywords: The Tale of Genji The previous Crown Prince

Empress Akikonomu dying wish become the Empress

要旨：『源氏物語』「葵」巻に描かれる故前坊の遺言は、六条御息所に回想される一回限りのものではなく、物語において継承され、ひいては秋好中宮立后の基盤となっている。

キーワード：源氏物語 故前坊 秋好中宮 遺言 立后

一 故前坊の遺言

『源氏物語』 「葵」巻には、六条御息所が故前坊宮

のことを思い出す場面がある。葵の上の死をめぐる光源氏との贈答後、我が身の運命のつたなさを思い知るなかにである。

なほいと限りなき身のうきなりけり、かやうなる聞こえありて、院にもいかに思さむ、故前坊の同じき御はらからといふ中にも、いみじう思ひかはしきこえさせたまひて、この齋宮の御事も、懇ろに聞こえつけさせたまひしかば、「その御代りにも、やがて見たてまつりあつかはむ」など常にのたまはせて、「やがて内裏住みたまへ」とたびたび聞こえさせたまひしをだに、いとあるまじきことと思ひ離れにしを、かく心より外に、若々しきもの思ひをして、つひにうき名をさへ流しはてつべきこと、と思し乱るるに、なほ例のさまにもおはせず。

（新編日本古典文学全集『源氏物語二』 「葵」五二～五三頁）

自身の生霊が葵の上を取り殺したとの噂が立つたとしたら、桐壺院はどのように思われるかと思ひ悩む六条御息所は、故前坊と桐壺院とのありし日を回想する。二人は同腹の兄弟で、なかでも親しく、故前坊は自らの死後のこととして、傍線部「この齋宮の御事も、懇ろに聞こ

*湘南工科大学 ライティングセンター 特別講師

えつけさせたまひしかば」と、斎宮すなわち後の秋好中宮のことを入念に頼み、桐壺院も「『その御代りにも、やがて見たてまつりあつかはむ』など常にのたまはせて」と、故前坊の代わりとなつてそのまま面倒を見ようと常々口にしていたという。この「懇ろに聞こえつけさせたまひしかば」に関しては、玉上琢彌が「斎宮の将来を²⁾」、坂本昇が「故宮の遺志を³⁾」とし、伊藤禎子は「娘の斎宮について遺言しておいたので⁴⁾」などと解釈されるのだが、故前坊の言葉を受けた桐壺院が「その御代り」として秋好中宮を後見しようとする物語展開とは、故前坊の「聞こえつく」ことを継承あるいは実現しようとする桐壺院の姿が読み取れる。つまり、故前坊の遺言を桐壺院が聞き入れたという構図である。

『源氏物語』に「遺言」の語は二〇例⁵⁾あり、関連する人物は、按察大納言・明石の入道・桐壺院・柏木・八の宮・末摘花の乳母・一条御息所・六条御息所となる。さらに、遺言を残した人物としての認定は「男性では、按察大納言、明石入道、紫上の祖父、前坊、桐壺院、常陸宮、少弐、朱雀院、柏木、八宮の一〇人である⁶⁾。女性では、桐壺更衣、紫上の尼君、六条御息所、末摘花の乳母、藤壺宮、一条御息所、紫上、大君の八人である」と物語の文脈からも

されている。文脈という点では、「ただこの君の御事をのみ言ひおきて」（「関屋」二―三六三）と空蝉のことを遺言する常陸守、中の君をめぐる八の宮の北の方の遺言⁷⁾、光源氏の作為ではあるが、「かの母君のあはれに言ひおきしこと」（「藤袴」三―三三五）なる夕顔の遺言、「亡せたまひなむ後のこども書きおきたまへる御処分の文ども」（「竹河」五―六〇）という鬚黒の遺産処分にまつわる書類も加えられる。『源氏物語』の遺言の先行研究からは、「かの遺言たがへじ」という用法が多く、遺言は遺された者の生きざまを呪縛するものとしてある⁸⁾。ところが明らかにされ、特に八の宮の遺言をめぐる、その機能が考究されてきた。清水好子は八の宮の遺言をもつて、「それは故人の言葉であるから永遠の規制力を持つ⁹⁾」とその効力を指摘、長谷川政春は、言葉の呪縛性を「遺言」から読み取り、「宇治十帖の主要人物たちを呪縛しないではおかなかつた故八宮の『言葉』は、同時に物語の作者自身においても、その精神構造を規定し、また呪縛しないではおかなかつたであろう¹⁰⁾」とし、作中人物の「遺言」が物語の構想にまで関わる様を明かした。こうした「遺言」と物語の構想の関係は、桐壺の更衣にも見出されている。更衣の「聞こえまほしげなること」（「桐壺」一―二三）につい

て藤井貞和は「口にこそ出さないにしろ、光宮の将来の栄達を帝にたのむ遺言」と解釈し、「死者の遺言が、あとにのこされる生者をしぼり、ひいては物語の方向を決める¹¹」と物語の構想と作中人物との「遺言」のありようを見定めた。さらに「遺言」には、受け取る側を規制・呪縛する働きとしてではなく「後見」の委託と関わる働きも指摘されている¹²。つまり「遺言」は、作中人物のふるまいにとどまらず物語の構想と深く関わる事が明らかにされてきたのである。これらの研究を踏まえ、故前坊の「聞こえつけさせたまひしかば」と遺言するふるまいも、物語の展開と関わりがあると想定される。

故前坊に関しては、六条御息所の年齢矛盾から生じる朱雀院と故前坊、二人の東宮が同時期に存在したという問題に、はやく多屋頼俊が合理的な解釈を提示する¹³も物語の実態から説の成立の困難さが証明され、以後年齢矛盾をめぐる構想論が進み、田村専一郎は、故前坊の輪郭を捉えるうえで、「前坊について論ずることは、すべてが推定説となる¹⁴」と述べる。坂本昇が、前坊廃太子説を唱え¹⁵以降廃太子説が続き、本多美奈子¹⁶、望月郁子¹⁷、石川倫子¹⁸も廃太子説を唱える。一方、非廃太子説としては、擬古文の本居宣長『手枕』¹⁹、また坂本はのちに廃太子説から撤退、藤本勝

義も非廃太子説を唱える²⁰。そのような中、高田祐彦は葵巻に突如語られ始める故前坊一家の登場を、「年立面では矛盾すら孕んだ世界」を「切り拓く起爆剤」と捉えた²¹。たしかに、故前坊を考えることは、『源氏物語』の抱える矛盾に直面することになる²²のは疑いのないところであるが、「齋宮の御事をも懇ろに聞こえつけさせ」た事実は、後に立后を果たす秋好中宮をめぐる物語と切り離してはおけないと思われる。

本稿では、秋好中宮の立后に至る道程には故前坊の遺言が関わる事を検討し、故前坊が物語に果たす役割を明らかにする。なお、故前坊の呼称は「前坊」と統一する²³。

二 「齋宮の御事」をめぐつて

六条御息所によって回想される「この齋宮の御事も、懇ろに聞こえつけさせたまひしかば」の表現を理解するため、「聞こえつく」の語を手がかりに以下、物語における使用状況を検討していく。

「聞こえつく」すなわち「お頼み申しあげる²⁴」の語は、冒頭場面を除き『源氏物語』に十二例²⁵描かれる。まず、桐壺院の発話である。「桐壺」巻、藤壺中宮・光源氏とともに大切に思う桐壺院が二人に親しむ

よう言葉をかける場面である。

①(帝)「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。

(「桐壺」一一四四)

桐壺院の言葉は「聞こえつけたまへれば」と表現されることで、藤壺中宮に頼み込む姿を示す。具体的には、桐壺院が藤壺中宮に光源氏の母親代わりになることを望んでいることから、子の処遇をめぐる発言になっている。藤壺中宮にとって光源氏は前妻の子にあたるため、桐壺院にはこの依頼が無理を強いるものだという認識のあることが「聞こえつく」の語から窺われる。このように、「聞こえつく」という表現が単なる依頼の域にとどまらない、無理を強いる状況を描き出す語であることは、次の、桐壺院のふるまいにも確認できる。

②御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて、大將の君によろづ聞こえつけたまふも、かたはらいなきものからうれしと思す。

(「葵」一一一七)

自身の讓位後、光源氏に東宮(冷泉帝)の後見を依頼する姿は「聞こえつけたまふ」と描かれる。東宮の後見とは、本来外戚が負うべきものであるうえに、光源氏は表向き東宮の兄にあたるため、この依頼もやはり無理を強いたものであることが「聞こえつく」の語で一層理解できる。後見の依頼という状況は朱雀院にも描かれる。自分だけを頼ってきた女三の宮は、自身の出家後実質的に後見がいなくなるため、後見をめぐる朱雀院の「聞こえつく」姿が繰り返される。まず、承香殿女御に女三の宮後見を依頼する朱雀院である。

③(朱雀院)「この世に恨み遺ることもはべらず、

女宮たちのあまた残りどどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。……女御にも、心うつくしきさまに聞こえつけさせたまふ。

(「若菜上」四一一〇)

かつて、朱雀院後宮において女三の宮の母藤壺の女御と妍を競い合っていた承香殿の女御にまで、朱雀院は女三の宮のことを「心うつくしきさまに」と親代わりにと頼む。それが無理を強いている事柄であることを「聞こえつく」の語が示している。次に、今上帝への依頼である。

④(源氏)「……内裏よりは、たびたび御使あり

けり。今日も御文ありつとか。院のいとやむごとくなく聞こえつけたまへれば、上もかく思したるなるべし。

(「若菜下」四―二五六)

今上帝から女三の宮へと見舞いの使者が頻繁である理由として、そもそも朱雀院が女三の宮の後見を今上帝に依頼していたことが明かされる。その表現には、「聞こえつく」の語がやはり確認できる。さらには、朱雀院が光源氏へと女三の宮のことを頼んだ折のことを回想する場面である。

⑤ (朱雀院) 「世の中の、今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくてただよはむことのあはれに避りがたうおぼえはべしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞こえつけて、年ごろは心やすく思ひたまへつるを、……

(「柏木」四―三〇九)

「御本意にはあらざりけめど」とあなたは本意でもなかったようだが、「聞こえつけて」すなわちおしつめたとの表現からは、「聞こえつく」の語が自身の念願を相手に強いる表現であることが伺える。朱雀院による、承香殿の女御・今上帝・光源氏への女三の宮後見依頼とは、無理を強いる依頼であったことが「聞こえつく」の語によって納得させられるのである。

「聞こえつく」の語は光源氏が主体となる例も確認できる。まず、玉鬘の六条院入りにあたり、花散里にその後見を頼む場面である。

⑥ 十月にぞ渡りたまふ。大臣、東の御方に聞こえつけたてまつりたまふ。

(「玉鬘」三―二二七)

依頼をする光源氏のありようからは、玉鬘その人の処遇の重さも知れるところであるが、そもそも花散里にとつて玉鬘とは自身とはゆかりのない女性であり、その素姓さえも知らない。そのような状況を押しての依頼は「聞こえつく」の語で描き出される。光源氏が後見役に他でもない花散里を選んだ理由をたどると、夕霧の後見を見事に果たしている実績によるものであったことが分かる。

⑦ (源氏) 「母も亡くなりけり。中将を聞こえつけたるに、悪しくやはある。同じごとうしろみたまへ。

(「玉鬘」三―二二七)

ここで回想される、花散里が夕霧の後見役となった状況も「聞こえつく」の語が見え、光源氏が玉鬘・夕霧ともに花散里にとつてはゆかりのない子どもの養育を頼み込むという状況であったことが理解される。

光源氏が「聞こえつく」姿は、朝顔の斎院への薫物

調合依頼の際にも確認できる。

⑧(螢宮)「いかなる御消息のすすみ参れるにか」とて、をかしと思したれば、ほほ笑みて、(源氏)「いと馴れ馴れしきこと聞こえつたりしを、まめやかに急ぎものしたまへるなめり」とて、御文はひき隠したまひつ。

(「梅枝」三一四〇五〜四〇六)

光源氏は螢宮の前に朝顔の齋院との關係をごまかしながら「聞こえつたりし」と口にするのだが、「いと馴れ馴れしきこと」を「聞こえつく」すなわち無理に強いしたという文脈である。さらに、秋好中宮に「聞こえつく」姿も描かれる。秋好中宮の出家の志を諫める場面である。

⑨(源氏)「……世離れたる住まひにもやとやうやう思ひ立ちぬるを、残りの人々のものはかなからん、ただよはしたまふなど、さきさきも聞こえつくし心違へず思しとどめて、ものせさせたまへ」など、まめやかなるさまに聞こえさせたまふ。

(「鈴虫」四一三八七)

光源氏が、自身が出家した場合、あとに残る夕霧や紫上らを面倒みてくれるようかつて「聞こえつけ」ていた²⁶という場面である。追認を迫る強い語調であることが「聞こえつく」の語によって理解できる。また光

源氏は、冷泉帝に薫の後見を「聞こえつけたまへりし」と託していたことも明かされる。

⑩二品の宮の若君は、院の聞こえつけたまへりしままに、冷泉院の帝とりわきて思しかしづき、後の宮も、皇子たちなどおはせず心細う思さるるまに、うれしき御後見にまめやかに頼み聞こえたまへり。

(「匂兵部卿」五一二二〜二二二)

このことは以前に描かれていないが、光源氏による冷泉帝への依頼は「聞こえつく」とされ、秋好中宮も薫を養子格²⁷としている。両者ともに薫を我が子として処遇していることから、光源氏の「聞こえつく」依頼は遵守されていると理解でき、「聞こえつく」依頼と依頼を受けた側のありようとして押さえられよう。

こうした例のほか、縁づける意でも「聞こえつく」は用いられ、左大臣が光源氏に葵上を縁づけたことが「聞こえつく」と表現される。

⑪故姫君を、ひき避きてこの大将の君に聞こえつけたまひし御心を、后は思しおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。

(「賢木」二二一〇二)

この結婚が、左大臣家の威信をかけたものであることが「聞こえつく」の語により説得力を持つ表現となっ

ている。また、女三の宮の出家を聞くに及び、回復の見込みもおぼつかなくなつた柏木が、最後に一目落葉の宮に對面することを望むなかで次のように表現される。

⑫ (柏木) 「かの宮に、とかくしていま一たび参
でむ」とのたまふを、さらにゆるしきこえたまはず。
誰にも、この宮の御事を聞こえつけたまふ。

(「柏木」四—三—一)
かつて、朱雀院より「行く先うしろやすく、まめやかなる後見まうけたまへり」(「柏木」四—三—一)と評されていたがその後見が叶わず、死後を「誰にも」託す姿は「聞こえつく」と表現され、柏木の落葉の宮への真心が、懸命な後見依頼から読み取れる表現になっている。

以上、『源氏物語』における「聞こえつく」の用例から、「聞こえつく」とは、懇願する状況で用いられる語で、受け手の立場は、兄弟・妻・恋人・子どもとなり、縁づける意では、婿も含まれた。「聞こえつく」言葉を向けられた者は、遵守することが前提にあるといえようが、無理を強いる内容のため遵守できない状況も描かれていた。ここから故前坊の姿に立ち返り、これら「聞こえつく」の用いられ方に照らすと、故前坊は、桐壺院に対して秋好中宮をめぐり単なる依頼を

したのではなく、懇願をしたといえよう。遵守が前提となる「聞こえつく」依頼であることから、故前坊の遺言のその後を確認していきたい。

三 継承される故前坊の遺言

故前坊の遺言はその内容が具体的に示されることはない。しかしながら、その亡き後、桐壺院が秋好中宮をどのように扱っていったのかを辿ることが故前坊の懇願を浮かび上がらせることになるのではないか。以下、桐壺院が秋好中宮をどのように扱っていったかを確認していきたい。

(院) 「故宮のいとやむごとなく思し時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。

(「葵」二—一八)

「葵」巻には、桐壺院が六条母子をめぐり光源氏を諫めるなか、傍線部「齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば」と秋好中宮を自身の皇女たちと同列にみなし

ている²⁸ことが描かれる。
たとえば、藤壺中宮へ入内を要請する場面に「わが

女御子たちの同じ列に」(「桐壺」一一四二)と見えることから、「この皇女たちの列に」と表現される秋好中宮の処遇は藤壺中宮の処遇を喚起させ、その手厚さを窺わせる。

さらに、秋好中宮が齋宮になった折のことは次のように表現されている。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮、
齋宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいと
頼もしげなきを、……

(「葵」二一一八)

傍線部の説明とは、秋好中宮は六条御息所を母とする、故前坊の姫宮という事実の再確認を促す。つまり秋好中宮の血筋が物語に改めて確認され、そのような方が朱雀朝の齋宮になったとの描写である。

「賢木」巻、齋宮の群行の様は次のようなものであった。

常の儀式にまさりて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとくおぼえあるを選らせたまへり。
院の御心寄せもあればなるべし。

(「賢木」二一九一)

伊勢群行には、傍線部「院の御心寄せ」と桐壺院から特別な配慮があったことが確認できる。秋好中宮が朱雀朝の齋宮になり、それに伴う「院の御心寄せ」とい

う桐壺院の特別な配慮については、すでに浅尾広良が秋好中宮は故前坊の御代に齋宮に立つべく決まっていたこと、それを桐壺院が果たしたことを指摘する²⁹。秋好中宮を齋宮に立てることは、処遇として最善の選択であったと理解できそうである。

こうした、遺言を端緒とする秋好中宮の処遇は、桐壺院によつてのみ果たされるもののだろうか。

いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見え
たまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ。

(「賢木」二一九三)

朱雀院は、別れの御櫛の儀の際、秋好中宮の麗姿に心が動く。注意されるのは、傍線部の「ゆゆしきまで」と形容される容姿が、入内要請の際に回顧されることである。

院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう思しおきければ、(院)「参りたまひて、齋院など御はらからの宮々おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」と、御息所にも聞こえたまひき。

(「濔標」二一三一九)

波線部の「ゆゆしきまで見えたまひし御容貌」とは、「賢木」巻、別れの御櫛の儀における「いとゆゆしきまで見えたまふ」容貌を指し、「ゆゆし」という表現の符合から朱雀院の恋情がひとまずは読み取れる。しかし、藤本勝義は、「ゆゆし」の語が原則として皇族にのみ用いられ、対象は若い人物、後に物語に重要な位置を占める者に使われ、「賢木」巻での秋好中宮像とは朱雀院の目を通し将来限りなき位に昇る属性が描き出されていることを読み取る³⁰。この指摘を踏まえれば、「賢木」巻での秋好中宮には、皇族としての属性も表現されていることになる。そして「濔標」巻での「ゆゆし」の語からは、秋好中宮の皇族たることが再び確認され、入内要請へと話題が移ることになる。入内要請には、傍線部「齋院など御はらからの宮々おはしますたぐひにて」とは、桐壺院が秋好中宮を自分の皇女と同列にみなそうとしていたことと重なる。ここでの「齋院」とは桐壺院の女三の宮を指し、その方と同じく桐壺院の娘として過ごせという意である。つまり、朱雀院は秋好中宮を自身の妹と表現しているのであり、桐壺院の処遇が継承されていることに気付かされる。本橋裕美は、齋宮と天皇とは本来親子であることから、秋好中宮と朱雀院とは擬似的な親子であること³¹を、春日美穂は、秋好中宮の入内に際し、後見

する太上天皇朱雀院に親としての側面³²をそれぞれ読み取る。つまり、桐壺院の処遇により、朱雀院は秋好中宮を妹とみなすこと、また、親という属性で秋好中宮を扱う姿が浮かび上がってくるのである。さらに、秋好中宮をめぐる処遇は光源氏にも確認できる。

（源氏）「……故院の御子たちあまたものしたまへど、親しく睦び思ほすもをさをさなきを、上の
同じ御子たちの中に数まへきこえたまひしかば、
さこそは頼みきこえはべらめ。」

（「濔標」二―三―三）

光源氏は、六条御息所の遺言により秋好中宮の後見を引き受ける。光源氏は、卑下の表現ではあるものの、秋好中宮を兄弟だと認識していることから、朱雀院と同様に桐壺院の処遇を継承していることになる。

故前坊の「聞こえつく」遺言とは、物語において、六条御息所による一回限りの回想に終わるものではなく、また桐壺院の御代で終わるものでもなかった。この遺言により、秋好中宮の処遇は輪郭を見せ始めるのであった。桐壺院から朱雀院・光源氏へと継承され、朱雀院・光源氏とともに秋好中宮とは兄弟、また親子という関係性が描き出されながら処遇の行方が描き出されていたのである。

四 秋好中宮の宿縁

ここまで、秋好中宮が故前坊の「聞こえつく」なる遺言を端緒として桐壺院から皇女格の処遇を受け、やがて斎宮の補任へ、また朱雀院・光源氏からは兄弟、親子に準じられていることを確認した。秋好中宮は、これらの処遇を踏まえ冷泉帝後宮へと入内しているのである。もちろん、秋好中宮の入内とは、藤壺中宮と光源氏の決断によって果たされていき、その役割とは光源氏の栄華を担うことにある。また入内については、吉野瑞恵が冷泉皇統の正当性を故前坊の血筋をひく秋好中宮が補完する³³ことを指摘するところだが、そもそも秋好中宮の入内・立后とは、誰の望むところであったか。母六条御息所の悲願であったかといえはむしろそうではない。

(物の怪) 「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、……」

(「若菜下」四―二三六)
物の怪となった六条御息所は、娘が中宮の位についてたことを喜ぶ姿を見せてはいる。しかし、六条御息所の

言葉は次のようにも描かれていた。

(御息所) 「……うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にても思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思つたまふる」など聞こえたまへば、あいなくものたまふかなと思せど、……」

(「濤標」二―三二―一―三二―二) 傍線部「いかでさる方をもて離れて見たてまつらむ」と秋好中宮の独身を望むと取れる言葉が確認できる。

この事実と秋好中宮の入内・立后とを照らすとき、故前坊の後見依託こそが、秋好中宮の入内・立后という形で結実したと読めるのではないか。なぜなら、秋好中宮の立后には「なほ梅壺あたまひぬ」(「少女」三―三一)と、予測を越えた展開であるとの語調、世人も驚く「御幸ひ」(「少女」三―三一)をもつ秋好中宮の姿を描いているからである。立后時、すでに父を失っている秋好中宮は、父が不在であるにも関わらずという意味においても「御幸ひ」であったにちがいない。しかし、故前坊は桐壺院に、娘のことを「聞こえつけ」ていた。立後にいたる結末からは、桐壺院から朱雀院、光源氏へと受け継がれた処遇が立后を支えているといえよう。

次の場面は、光源氏四十賀における秋好中宮の姿で

ある。

ありがたき御はぐくみを思し知りながら、何ごとにつけてかは深き御心ざしをもあらはし御覽せさせたまはむとて、父宮、母御息所のおはせまし御ための心ざしをもとり添へ思すに、かくあながちにおほやけにも聞こえ返させたまへば、……

（「若菜上」四一九七）

秋好中宮は、光源氏に対するこれまでの感謝として、傍線部に見える父故前坊、母六条御息所への報恩の気持ちを添えてこの祝賀を執り行っている。

装束限りなくきよらを尽くして、名高き帯、御佩刀など、故前坊の御方ざまにて伝はりまありたるも、またあはれになむ。古き世の一の物と名あるかぎりは、みな集ひまゐる御賀になむあめる。

（「若菜上」四一九八）

祝賀に、傍線部「名高き帯、御佩刀など、故前坊の御方ざまにて伝はりまありたる」と、父故前坊ゆかりの品を揃えていることは見逃せない。この事実の小嶋菜温子は、光源氏の家と血とは別の系譜をなすことを示すことに注意を促し、ただし、故前坊の家と血筋の問題は本格的に物語化されることはないとも指摘する³⁴。しかしながら、これまで見てきたように、秋好中宮の人生の軌跡に故前坊の「聞こえつく」遺言は大きく関

わっていた。

次の場面は、光源氏がかつて関わりをもった女性を回想、評論するなか六条御息所について語るくだりである。

中宮を、かく、さるべき御契りとはいひながら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なほされぬらん。

（「若菜下」四二二〇）

秋好中宮の立后は自分の後援なしには不可能であったとし、六条御息所もあの世ながら今は見直してくださっているだろうと述べる。注意されるのは、秋好中宮の立后を、傍線部「さるべき御契り」と捉えている点である。秋好中宮の立后が「さるべき御契り」すなわち定まった宿縁であるとすれば、その内実は故前坊の皇族たる血筋を受け継ぎ、その「聞こえつく」遺言によつて守られ形づくられていくものであったといえよう。そして、遺言が皇統で受け継がれていたことは、故前坊が皇統譜において排除される存在ではなく、連なるべき者であったことをも浮かび上がらせてもよい。

本稿は、故前坊の「聞こえつく」遺言は、秋好中宮の立后への道程を遡るとき、六条御息所の一限りの

回想に留まるものではなく、皇統において遵守されていったものであることを明らかにした。

注

- 1 本文の引用は小学館刊新編『源氏物語』に依り、私に傍線等を付した部分がある。
- 2 玉上琢彌『源氏物語評釈二』『葵』角川書店 一九六五年
- 3 坂本昇「故前坊妃六條御息所」『源氏物語構想論』明治書院 一九八一年
- 4 伊藤禎子「人物ファイル―六条御息所 人間関係②―前坊・桐壺帝」『人物で読む源氏物語 六条御息所』勉誠出版 二〇〇五年
- 5 池田亀鑑編『源氏物語大成四』索引篇 中央公論社 一九五三年、新日本古典文学大系『源氏物語索引』岩波書店 一九九九年
- 6 山畑幸子「源氏物語」における「遺言」―桐壺院の遺言を中心に―『清心語文』第五号 二〇〇三年八月
- 7 太田敦子「形見の宇治の中の君―母の遺言をめぐって―」『源氏物語 姫君の世界』新典社 二〇一三年
- 8 針本正行「遺言」林田孝和・原岡文子他編『源氏物語事典』大和書房 二〇〇二年
- 9 清水好子『源氏の女君 増補版』塙書房 一九六七年
- 10 長谷川政春「宇治十帖の世界―八宮の遺言の呪縛性―」『物語史の風景―伊勢物語・源氏物語とその展開―』若草書房 一九九七年
- 11 藤井貞和『源氏物語入門』講談社 一九九六年
- 12 加藤洋介「冷泉―光源氏体制と―後見」―源氏物語における准拠と―(虚構)―『文学』五七巻七号 一九八九年八月、山口一樹『源氏物語』における後見の依託―遺言の物語の型について―『東京大学国文学論集』第十二号 二〇一七年三月
- 13 多屋頼俊「もののけの力―六条の御息所を中心に―」『源氏物語の思想』宝蔵館 一九五二年
- 14 田村専一郎「前坊のことども」『文学論輯』第八号 一九六一年四月
- 15 川崎(坂本)昇「六条御息所の信仰的背景」『國學院雑誌』第六八巻九号 一九六七年九月、「故前坊妃六條御息所」『源氏物語構想論』明治書院 一九八一年
- 16 本多美奈子「前坊の御息所論」『立教大学日本文学』第七四号 一九九五年七月
- 17 望月郁子「前坊」『松学舎大学人文論叢』第六三巻 一九九九年一月
- 18 石川倫子「源氏物語」の前坊―桐壺帝の弟宮―『金沢工業大学日本学研究所』『日本学研究』第一三三号 二〇一〇年一月
- 19 本居宣長「手枕」寛政七年刊本『本居宣長全集 別巻一』筑摩書房 一九七六年
- 20 藤本勝義「前坊」―故父大臣の御霊―『源氏物語の想像力』笠間書院 一九九四年
- 21 高田祐彦「六条御息所の(時間)―源氏物語の文学史」東京大学出版会 二〇〇三年
- 22 秋澤互「源氏物語」の時代構造、田坂憲二「源氏物語」前史―登場人物年齢一覧作成の可能性―田坂憲二 久下裕利編 考えるシリーズII②知の挑発『源氏物語の方法を考える―史実の回路』武蔵野書院 二〇一五年
- 23 原田芳起「物語における人物呼称をめぐる解釈上の問題」『中古文学』第二七号 一九八一年五月
- 24 きこえ・つ・く「聞こえ付く」(他カ下二)「言ひ付く」の謙讓語「お頼み申し上げる」。(中田祝夫総監修『古語大辞典』小学館 一九八三年)
- 25 池田亀鑑編『源氏物語大成四』索引篇 中央公論社 一九五三年
なお、「言ひつく」は三例。①「現のわが身ながらさる疎ましきことを言ひつけらるる」(『葵』二一三六―三七頁)②「かしこの寝殿、堂になすべきこと、阿闍梨に言ひつけはべりにき」(『宿木』五一―四六三頁)③「かの人の言ひつけしことなど」(六一三―三六〇頁)。①は六条御息所が生霊事件について世間から噂をされる場面。②は薫が寝殿・御堂の改造を阿闍梨に依頼する場面。③は紀伊守が布施の装束を尼たちに頼む場面。
- 26 「なほこの門ひろげさせたまひて」(『薄雲』二一四六―一頁)「中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり」(『藤裏葉』三―四五三頁)
- 27 秋好中宮は、薫を養子格にしている」(『匂兵部卿』五一―二二頁 頭注一)

- 28 「齋宮の御事をも我御子のこたくにおほす也」伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』桜楓社一九七五年
- 29 浅尾広良「朱雀帝御代の齋宮・齋院」『源氏物語の皇統と論理』翰林書房二〇一六年
- 30 藤本勝義「源氏物語における前坊」『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院一九九四年
- 31 本橋裕美「別れ路に添へし小櫛」が繋ぐもの―秋好中宮と朱雀院の恋―『齋宮の文学史』翰林書房二〇一六年
- 32 春日美穂「薫衣香を贈る朱雀院―齋宮女御入内の贈り物の意義をめぐって―」『源氏物語の帝―人物と表現の連関―』おうふう二〇〇九年
- 33 吉野瑞恵「光源氏の皇統形成―前坊の娘・秋好入内の意味―」『王朝文学の生成』『源氏物語』の発想・「日記文学」の形態』笠間書院二〇一一年
- 34 小嶋菜温子「藤壺宮と六条御息所の「罪」と亡魂―秋好中宮にみる故・前坊家と六条院」『源氏物語へ 源氏物語から』『中古文学研究 24 の証言』笠間書院二〇〇七年
- 付記 本稿は、二〇一七年度全国大学国語国文学会冬季大会（於富山大学）で口頭発表したものを礎としている。